

## 2000 年度ワークショップ報告要旨

## 《ロシア語テキスト研究とデータベース》

安藤 厚 (北大)

ロシア語データベースを利用したコンコダンス作成・テキスト研究は、この5年ほどで急速に発展してきたが、技術的にも、研究テーマ・手法の面でも、未だ試行錯誤の段階で、幅広い研究経験の交流が望まれる。本ワークショップでは、平成10-12年度科学研究費による共同研究「18-20世紀ロシア小説の文体の計量的・総合的比較研究」(研究代表者: 灰谷慶三, 安藤厚; 課題番号: 10410106)の一環として、現在利用可能なロシア語リソース、アプリケーションについての情報交換、また研究テーマ・手法の上でのさまざまなアイディアについて、テキスト研究の実例も含めて発表を行った。

## カラムジンにおける造語法について

— ラヂシチェフと比較して —

浦井 康男 (北大)

これまでに作成した三つの lemmatized concordance の語彙統計に他のデータも加えて、ラヂシチェフ→カラムジン→プーシキンにおける語彙的・文体的発展をたどっているが、その中で語彙的意義を持つ語 (полнозначное слово) と機能語 (служебное слово) で分析手法を変える必要があることが分かった。後者では時間的推移の中での使用頻度の増減が語彙体系でのその語の位置を決める要因になるが、前者では頻度の違いは単に主題の相違でしかない。ここでは造語体系に着目し、二作家の語彙体系の比較を行った。詳細は『スラヴ学論叢』5-1 (2001) に掲載の論文を参照。

## 『オブローモフ』における嗜好飲料

大西 郁夫 (北大)

電子データを用いる利点のひとつにキーワードを一瞬にして検索、網羅できることがある。これを利用す

れば文学作品における特定の語の出現箇所の追跡がかなり容易になる。また同時代的なコンテキストを把握するための他の作品との対比も、電子データを利用すればかなり作業を軽減できる。ここではゴンチャロフの『オブローモフ』を対象にコーヒーやウォトカといった嗜好飲料の出現の様子と作品におけるその意味を再検討した。詳細は本号掲載の論文を参照。

## 『カフカーズの捕虜』3作品の語彙比較

木村 崇 (京大)

プーシキン、レールモントフ、レフ・トルストイは『カフカーズの捕虜』という同名の作品を残している。これらの作品にはロシア・オリエンタリズムの諸相が反映されており、近年の「十把一からげ」的なオリエンタリズム論に影響されたロシア文学研究を批判的に検証する上で、格好の材料を提供している。3作品中からオリエンタリズムに関わると思われる共通語彙を抽出し、それらが作者たちのどのような東洋観の産物であるかを考察した。詳細は『スラヴ学論叢』5-2 (2001) に掲載予定の論文を参照。

## コーパス利用による語彙分析

— 言語学と文学研究の新たな出会いをめざして —

三谷 恵子 (京大)

Macintosh 用テキスト処理プログラム (Conc, TextUtil, MonoConc など) を利用し、文学作品のコーパスに基づく語彙分析のサンプルを示した。具体的には、19世紀から現代までのさまざまな文学作品を分析対象とし、以下のような試みを提示した。

- ①ある鍵語に対する共出現語のパターンから、鍵語の意味特性を探る。
- ②正規表現検索を用いて、動作主を表す-тель 派生形態素を持つ語彙を取り出し、作品や時代による分布を明らかにし、ロシア語のレキシコンがたどった変遷の一端を知る。

詳細は『スラヴ学論叢』5-1 (2001) に掲載の論文を参照。